

東京大学 海外留学・国際交流プログラム報告書(超短期プログラム用)

2016年9月2日

東京大学での所属学部・研究科等:	農学部	学年(プログラム開始時):	学部3
参加プログラム:	International Summer School	派遣先大学:	University of Sussex
卒業・修了後の就職(希望)先:			
<input checked="" type="checkbox"/>	1. 研究職	<input type="checkbox"/>	2. 専門職(医師・法曹・会計士等)
<input type="checkbox"/>	3. 公務員	<input type="checkbox"/>	4. 非営利団体
<input checked="" type="checkbox"/>	5. 民間企業(業界:)	<input type="checkbox"/>	6. 起業
<input type="checkbox"/>	7. その他()		

派遣先大学の概要

イングランド南部ブライトン近郊にある総合大学。1961年設立と比較的新しい大学だが3人のノーベル賞受賞者を輩出している。学際教育や生涯教育に力を入れていることで知られる。

参加した動機

学部生のうちに、英語で専門的な内容を学ぶ経験がしたかった。また、専攻分野に近い他国の学生と交流したかった。イギリスで生活することで英語を上達させたかった。

参加の準備

①プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)

手続きはすべてオンラインで行った。不明点や問題はメールで聞けば対応してもらえる。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

6か月未満の留学だったのでShort-Term Study Visaを取得した。これは事前に申請する必要がなく、空港での入国審査の際に発行される。プログラムへの参加を証明する書類(offer letter)が必ず必要で、銀行の残高証明や帰りのフライトチケットも確認される場合があるので用意して手荷物に入れておいた。入国審査には1時間ほど並んだが手続き自体はあっという間だった。

③医療関係の準備(出発前の健康診断、常備薬、予防接種等)

健康診断や予防接種は特に受けなかった。胃腸薬、整腸剤、ビタミン剤など使う可能性がありそうな薬はすべて持参した。

④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

加入必須であった学研災付帯海外留学保険に加入した。

⑤プログラム参加にあたって東京大学の所属学部・研究科(教育部)で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

試験や授業はない時期だったので履修については何もしなかった。学部に海外旅行・一時帰国届を提出した。

⑥語学関係の準備(出発前の語学レベル・語学学習等)

2015年12月受験のIELTSスコアは7.0(R8.5 L7.5 S6.0 W6.0)だった。工学部のスペシャルイングリッシュレッスン(英会話レッスン)を受講した。

⑦日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

電子レンジで米が炊ける容器や米は重宝した。シャンプー、ティッシュ、洗剤等を持参したが大学の購買で手に入ったのでなくてもよかった。日本より10度ほど気温が低く、特に朝晩は冷えるので夏でも厚手のパーカーなど上着は必須。寮の布団が薄く、荷物に入るなら毛布を持ってきてもいいくらいだった。

学習・研究について

①プログラムの概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている内容等)

履修した授業はIntroduction to Medicinal Chemistryである。8人クラスで、机を口の字型にして1辺に教授が座り、ほかの辺に生徒が座る形だった。1日90分、週4回授業があった。最初の授業でプリントが配られ、それと教科書を使って予習した。授業では板書は少なく、プリントに沿って教授が口頭で説明するのを書きとった。皆授業中や授業前後に盛んに質問し、教授は丁寧に答えていた。授業中に取ったノートは殴り書きになってしまったので、授業後に教科書やプリントも読みながら書き直した。授業の復習のための勉強会も行った。プログラムの最後にはレポートの提出とテストがあった。どちらも教官が快く相談に乗ってくれた。ネイティブのクラスメートも文法や言葉の使い方について沢山アドバイスをくれた。テストはきちんと勉強すれば難しくなかった。

②学習・研究面でのアドバイス

自分はかなり躊躇してしまっていたが、わからないことはどんどん質問するべきだと感じた。授業中に誰かの質問で進行が止まっても嫌な顔をする人はいなかったし、むしろ理解が深まった。クラスメイトに聞くことで仲良くなれたりもする。また、しっかり予習することで格段に授業についていきやすくなった。

③語学面での苦労・アドバイス等

予想以上に英語が聞き取れず、かなり苦労した。教授はゆっくり話してくれたが専門用語などわからない単語がたくさんあった。授業の予習の際に単語もしっかり調べておくのと聞き取りやすくなった。参加学生の半分弱がネイティブ(そのうちほとんどがアメリカ人)で、非ネイティブの学生も流暢に話す人が多かった。学生同士で話すときにも聞き取りに苦労したが、わからなかったらSorry?と聞き返すことが大事だと思った。出国前にBBCなどでリスニングを鍛えればもっと円滑にコミュニケーションできたと思う。

①宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

キャンパス内の寮に滞在した。家賃は600ポンド(約10万円)で、プログラム参加者はほぼ全員この寮に住む。新しいきれいな建物だった。一人部屋で、各部屋にトイレとシャワーがあり、キッチンが6人で共用だった。週に1度トイレ、シャワールーム、キッチンに清掃が入った。調理器具や食器は用意されている。足りないものは各々買い足して共用していた。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

気温は日本より10°Cほど低かった。朝晩は10°C台前半になり、寒くてよく眠れないこともあった。時々気温の高い日があっても、湿度が低いので暑苦しさは感じなかった。大学は丘と放牧地に囲まれていた。大体の買い物はキャンパス内の店で済む。足りないものはバスや電車でブライトンの中心部に行けば手に入った。食事は自炊と外食が半々だった。学食のほかに夜遅くまでやっているバーも(キャンパス内に!)ある。お金は、日本で両替するよりレートがよかったので、キャッシングで現金を得るかカード払いがほとんどだった。学内に24時間使えるatmがあった。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)
大学はのどかな田舎町にあり、治安の悪さは感じなかった。ロンドンではスリらしき人も見かけた。街に出るときは予備の財布とお金を常に持ち歩いた。滞在中風邪をひいたので無理をせず休養した。キャンパス内には薬局があった。
④要した費用について(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)
約64万円(航空賃18万、授業料20万、教科書代1万、家賃10万、食費・交通費・娯楽費15万円)
⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)
プログラム付帯の奨学金を16万円、東京大学から受給した。
⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)
自分には行かなかったが学校のジムを使うことができた。週末や放課後には大学が観光ツアーやイベントを企画してくれた。ブライトンとロンドンには公共交通機関で行けるが、他の観光地へは交通の便がよくないのでバスツアーに参加した。金曜日は授業がないため、3連休を使ってヨーロッパの他の国に旅行している学生もいた。石造りの古い立派な建物が多く残っていて、街並みを見るだけでも楽しかった。また、ロンドンの美術館や博物館は収蔵品がとても豊富な上入館無料だった。
派遣先大学の環境について
①参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)
学習面・精神面で学生をサポートする学生相談室があった。Residential adviserという、寮での問題に対応してくれるスタッフがいた。
②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC環境等)
図書館は9時から5時まで開館していて、広く蔵書も多かった。ジムは2つあった。食堂は大きいものが一つと小さいものがいくつかあった。寮のすぐ近くにsocial centreがあり、24時間パソコンとプリンターが使えた。大学内では無線LANが使える、部屋には有線LANがあった。
プログラムを振り返って
①プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感
このプログラムでは、英語で自分の関心のある分野を勉強することができ、とてもいい経験になった。英語が話せるだけで世界中の多くの人とコミュニケーションできるという便利さを改めて感じた。同時に、自分の英語力が不十分なために満足に意思疎通ができないもどかしさも味わった。これらはこれから英語を勉強する大きなモチベーションになるだろう。授業の内容そのものもとても興味深かった。薬を開発する上での基本的な考え方と個別の薬についての知識を両方得ることができた。授業時間数が少ないため予習復習に時間を割くことができてよかったと思う。また、世界中の学生と交流して、以前よりいろいろな国が身近に感じられるようになった。1か月という短い期間で劇的な成長はなかったが、この経験がこの先様々な局面で原動力やヒントになってくれるだろう。参加して本当に良かった。
②参加後の予定
英語の勉強に力を入れたい。機会を見つけてぜひまた海外に行きたい。

③今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

このプログラムは、日本人がいない環境で過ごしたい人におすすめである。今年は100人以上の参加者中日本人は2人だけだったようだ。英語力に自信がある人は、授業や友達との会話を思う存分楽しめると思う。英語力にやや不安があっても意外と周りの人が助けてくれるのでなんとかやっていけるし、非常にいい刺激になる。迷ったら参加してみればきっと得るものがあるはずだ。

その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

サセックス大学から送られてきたパンフレットに、入国手続きや交通事情など有用な情報が沢山載っていた。Facebookグループも役に立った。

②その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。

